様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：１１５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０５２８

研究課題名（和文）創造的逸脱表現における文法と意味解釈のインターフェイス

研究課題名（英文）Exploring Innovative Deviation at the Interface of Grammar and Semantic Interpretation

研究代表者
鈴木　亨（Suzuki, Toru）

山形大学・人文学部・教授

研究者番号：７０２１６４１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：　言語の創造的逸脱表現は、広義の文法（統語論と意味論）における制約の体系と現実の文脈における言語使用のはざまで生じる。本研究は、いわゆる創造的逸脱表現が文法的に認可される条件を精査することにより、言語使用のインターフェイスにおいて創造性が発揮されるメカニズムの理論的解明を試みた。主に非選択目的語を伴う結果構文の認可条件と、活動動詞に形容詞が後続する場合の創造的解釈のしくみについて考察した。

研究成果の概要（英文）：　Innovative deviation in language arises as an interaction between grammar in a broad sense, i.e., syntax and semantics, and language use in actual contexts. This study attempts to explicate how various linguistic factors can contribute to the innovation of creative linguistic expressions through examination of grammatical licensing conditions at the interface of language use. Two main constructional objects are examined: the resultative construction with unselected objects and the deviant use of some activity verbs with adjectival complements.

研究分野：人文学

キーワード：文法　意味解釈　逸脱表現　創造性　構文

１．研究開始当初の背景

言語の創造的逸脱表現は、広義の文法（統語論と意味論）における制約の体系と現実の文脈における言語使用のはざまで生じる。中核的な事例とは異なり、逸脱表現は周辺的な現象であるため、コーパス調査のような量的検証では必ずしもその実態を捉えることが容易ではない。そのため、事象の説明も個別の語彙の特殊性や慣用性に帰されてしまう傾向がある。しかし、文法的逸脱は無秩序に生じるものではなく、個別の事例の成立条件を精査することによって、文法と言語使用のインターフェイスにおいて創造的逸脱表現が認可されるしくみについて、一定の一般性を持つ説明が可能になることが予想される。

２．研究の目的

本研究は、いわゆる創造的逸脱表現が文法的に認可される条件を精査することにより、言語使用のインターフェイスにおいて創造性が発揮されるメカニズムの理論的解明を試みた。主に非選択目的語を伴う結果構文の認可条件と、活動動詞に形容詞が後続する場合の創造的解釈のしくみを明らかにし、文法と意味解釈におけるインターフェイスについての理論的一般化を図ることを目的とする。また、周辺的事例研究から文法理論にどのように貢献できるかを創造的逸脱表現の構文分析を通じて考察する。

３．研究の方法

結果構文における創造的逸脱表現に関して、特に非選択目的語の認可のメカニズムについて先行する理論研究の批判的再評価を進めるとともに、非選択目的語を伴う関連構文についても、共通点と相違点を明示化する。具体的には、関連研究の文献収集とともに、事例データの収集と整理を行い、一般性のある理論的説明の構築を進める。

また、活動動詞補部における形容詞の副詞的用法については、まだ事例研究の範囲が限定的であり、類例のデータ検証や、形容詞と副詞の区別について理論的考察を進める必要がある。また、先行する動詞の特性について具体的データの収集分析を進めつつ、文法と意味解釈のインターフェイスについての理論的一般化を図る。

いずれの研究対象も、現実の言語使用の文脈を重視するため、従来の形式的な文法理論研究のみならず、語用論的知見を説明に取り込む必要がある。

４．研究成果

主に、（１）非選択目的語を伴う創造的結果構文（e.g He sneezed the tissue off the table.）、（２）活動動詞に形容詞が伴う創造的逸脱表現（e.g. Think different.）、そして（３）移動表現の言語解析理論についての研究を行った。

（１）非選択目的語を伴う創造的結果構文

いわゆる創造的な結果構文において非選択目的語が認可される意味解釈の制約を明示的に特徴づけることを通じて、結果構文の慣用性と創造性について考察を進めた。

Boas (2003)の構文文法による結果構文研究では、動詞と結果句の組み合わせに関して、その大半が慣用的なものであり、いわゆる創造的で新奇な逸脱表現の事例は非常に限定的であり、従来の研究で想定されているほどには構文としての生産性は高くないと論じられている。さらにそのような見地から結果構文の構文としての特性の一般化は事実上放棄されている。

本研究では、Boas の研究が結果構文の生産性と創造性を過小評価しているとの認識に立ち、非選択目的語を伴う結果構文の中でも、特に一回性（one shot）の創造的で新奇な事例と見なされる結果構文における意味解釈のしくみを精査し、その構文特性を動詞の意味タイプに応じて一般化された説明として提示することを試みた。その過程で、Boas の用例基盤モデルによる類推分析や、Broccias (2003)における非選択目的語の認可条件分析などの先行研究には潜在的な問題があり、十分な妥当性を持つ説明ではないことを批判的に検証した。

代案として、創造的な結果構文における非選択目的語の解釈は、４つの意味論的観点から構文としての一般化が可能であることを明らかにした。１つは、force dynamics（Talmy 2000）に基づき、行為者に起因する作用が他の参与者に伝達される場合、第一の受け手から第二の受け手まで二段階の作用の伝達（force transmission）がありうること、関連して２つ目には、作用伝達には「部分と全体（part/whole）」および「図と地（figure/ground）」という意味概念に基づく自体の把握が関与すること、３つ目に、語用論の解釈条件として、「世界知識」と「文脈知識」が動詞のタイプによって異なる関与の仕方をすること、４つ目に、本来は言語表現としては実体化されない抽象的作用を具体的近接物によって代行し可視化する機能を持つ「代用目的語」の解釈である。

文脈への依存度が高く比較的まれな事例であるとはいえ、この構文で自然な解釈が容易に得られるという事実は、文法理論として一般的説明を追求する価値のある言語事実であることを示している。

さらに、way 構文など関連構文との比較から、非選択目的語を伴う結果構文の生産性の低さは、主に文脈を含めた変化事象解釈の全体に及ぶ整合性の計算上の複雑さに起因し、逆説的にそこに創造的と評価されうる表現が生まれる可能性があることを指摘した。

（２）活動動詞に形容詞が伴う創造的逸脱表現

1997 年に米国 Apple 社の宣伝文句として採

用された'Think different'という英語の表現は、一見すると'Think differently'の略式表現ではないかと思われるが（ただし、母語話者においても解釈の判断は分かれる）、この逸脱的な表現が完全に容認可能ではないにせよ、なぜ創造的な表現として一般に受け入れられるのか、その背景にある英語における形容詞と副詞の形態論上の対立の分析や、可塑性の高い活動動詞の中でもとりわけ動詞 think の語彙意味論的特性に注目した構文分析の手法により、創造的な逸脱表現を認可する文法のしくみについて考察した。

当該表現が命令文であることを前提とすると、次の３つの構文解釈の可能性が考えられるが、それぞれ単独ではこの表現をもっとも適切に特徴づける説明とはならないことを実例の調査に基づき論証した。（１）形容詞に後続する目的語が省略されている。（２）形容詞が動詞補部として組み合わされている。（３）different は形容詞ではなく、副詞（differently）として解釈される。

しかし、関連する言語表現（動詞 think が抽象名詞の目的語を伴う限定的な他動詞用法（e.g. Think victory）、派生的な同族目的語の用法、形容詞の副詞的解釈における外面的ふるまいから内面的属性評価への拡張、様態を表す way および the same の副詞化、命令文の非現実モードにおける結果解釈など）を精査すると、当該表現は、標準的な英語話者の文法体系に照らすと厳密には逸脱的であると思われるが、いわば関連する表現のネットワークに支えられて、標語や宣伝文句などの命令文という限定的な言語使用の文脈においては許容されうるものである可能性を示した。さらに、個別動詞としての think の語彙特性が逸脱用法を生み出す背景にあり、言語使用の場において文法に関わる創造的な言語変化が生じる際には、語彙に関しては局所的に拡張していく可能性が示唆される。

（３）移動表現の言語解析のしくみ

日常の言語使用における多様な移動表現の解釈を確定するための言語解析の理論と方法をめぐって、Mani & Pustejovsky (2012) の計算言語学研究のアプローチを批判的に検討し、文法知識の体系と現実の言語使用における意味解釈のギャップを埋める理論研究のあり方について考察した。

Mani & Pustejovsky は、計算理論上の要請として意味解釈の合成性（compositionality）と指示性（denotationality）を理論構築の必須の条件として固持するが、認知意味論的立場では、言語を形式化によって捉えることの限界を認識するところから、合成的な形式性を扱うレベルと非合成的な概念意味を扱うレベルをより柔軟に分離したアプローチも存在する。また、Mani & Pustejovsky の形式意味論の枠組みでは、言語使用の文脈理解における語用論の重要性を認めつつも、実質的に語用論を取り込むための方法論上の検討はなされていない。さらに、彼らが動詞意味論の基本的な枠組みとして援用する Talmy（1985，2000）の「衛星枠付け（satellite framing）」と「動詞枠付け（verb framing）」の動詞タイプの二分法に対する近年のさまざまな批判的再検討（Slobin 2006, Talmy 2009 他）が潜在的に持ちうる理論的な帰結とその影響に注目すべきである点などを指摘した。

（４）今後の展望

本研究では、非選択目的語を伴う結果構文と形容詞補部を伴う活動動詞の逸脱的表現を中心に、既存の文法体系には厳密には収まらないいわゆる創造的逸脱表現が認可されるしくみについて、言語使用における文法と意味解釈のインターフェイスに注目して考察を進めた。言語の創造性に基づく文法からの逸脱を理論化するためには、広義の文法（統語論と意味論）だけでなく、世界知識や文脈情報など語用論的要因、さらには関連する周辺的表現との相互関係などを統合的に捉える理論の枠組みが必要となる。また、逸脱表現に見られる言語の創造性の研究は、言語の周辺からやがては中核に至る言語変化のプロセスを解明する上で、重要な役割を果たすことが期待される。

〈引用文献〉

Boas, Hans C. (2003) *A Constructional Approach to Resultatives*. CSLI Publications, Stanford.

Broccias, Cristiano (2003) *The English Change Network: Forcing Changes into Schemas*, Mouton de Gruyter, Berlin.

Mani, Inderjeet & James Pustejovsky (2012) *Interpreting Motion: Grounded Representations for Spatial Language*, Oxford University Press, Oxford.

Slobin, Dan I. (2006)"What Makes Manner of Motion Salient Explorations in Linguistic Typology, Discourse, and Cognition,"Space in *Language: Linguistic Systems and Cognitive Categories*, ed. by M. Hickmann & S. Robert, 59-81, John Benjamins, Amsterdam.

Talmy, Leonard (1985) "Lexicalization Patterns: Semantic Structure in Lexical Forms," *Language Typology and Syntactic Description Vol.3*, ed. by T. Shopen, 36-149, Cambridge University Press, Cambridge.

Talmy, Leonard (2000) *Toward a Cognitive Semantics*, MIT Press, Cambridge.

Talmy, Leonard (2009) "Main Verb Properties and Equipollent Framing," *Crosslinguistic Approaches to the Psychology of Language: Research in the Tradition of Dan Issac Slobin*, ed. by J. Guo et al., 219-257, Lawrence Erlbaum Associates, Mahwah, NJ.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　4 件）

① 鈴木亨（2012）「構文における創造性と生産性−創造的な結果構文における非選択目的語の認可のしくみ」『山形大学人文学部研究年報』10 号, 109-130.(査読有)

② 鈴木亨（2013）「結果構文における非選択目的語の意味解釈」『日本英文学会第 85 回大会 Proceedings』, 146-147.（査読無）

③ 鈴木亨（2014）「Think different の言語学−創造的逸脱表現を支える文法のしくみ」『山形大学人文学部研究年報』11 号, 69-86.（査読有）

④ Toru Suzuki（in press）Review: Interpreting Motion: Grounded Representations for Spatial Language, *English Linguistics* 32.（査読有）

〔学会発表〕（計　3 件）

① 鈴木亨（2012）「結果構文における非選択目的語の意味解釈−文法の規範性と言語使用のはざまで」日本英文学会東北支部第 67 回大会（於岩手県立大学, 11 月 17 日）

② 鈴木亨（2013）「結果構文における創造性と生産性」日本英語学会第 31 回大会（於福岡大学, 11 月 10 日）（招待発表）

③ 鈴木亨（2014）「創造的逸脱表現の認可をめぐって−Think different の構文分析」日本英文学会東北支部第 69 回大会（於弘前大学, 11 月 29 日）

６．研究組織

(1)研究代表者

鈴木　亨（SUZUKI Toru）
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：70216414